

室神山

学校便り
令和2年2月18日号
江津市立江津東小学校長 安食 徹

早いもので、令和元年度も残すところ1ヵ月ちょっとになってしまいました。子どもたちの成長は凄まじいもので、4月頃の姿を思い起こすと、同じ子どもだろうかと感じさせられるくらいの成長を遂げた子もいます。自分に与えられた時間を自分の成長のために役立てていった結果だろうと思います。心身共に成長の著しい小学生時代。3月の期間は、次年度の準備としての大変重要な意味を持ちます。4月のスタートを、飛躍のためのジャンプ台にできるかどうかがかかっていると言えます。この時期を自分の成長のために役立てられるよう、集中して「今、ここ」を一生懸命に生きていってほしいと思います。



児童集会

1月15日(水)に広報委員会が児童集会で発表しました。プロジェクターも利用し、広報委員会の仕事についてわかりやすく説明しました。発表後には、感想や要望など多くの反応がありました。要望については、その都度、適切に応答できていました。4年生以下の児童も、委員会とは何なのかについての具体的なイメージを持つことができたのではないかと思います。



授業公開日

1月22日(水)は授業公開日でした。公開授業の後はPTAのキンボール交流会がありました。今年でキンボールは3回目となります。とても盛り上がり、楽しい時間となりました。



各学年の公開授業にも沢山の保護者の方に来ていただき、子どもたちも張り切って取り組んでいました。家族に見てもらえるということは、小学校時代の子どもにとっては、とてもパワーをもらえることなのだと思います。目をかけ、世話をし、愛情をかけることの量や質に比例して、教育効果が上がる傾向が強い貴重な児童期です。一生一度の小学生時代を親子で共に楽しみ、大切にしていってください。

6年生の公開授業は、薬物乱用防止教室でした。警察の方にも来ていただき、薬物の恐ろしさについて教えてもらいました。高度情報化社会に入り、都会も地方も薬物のリスクは変わらなくなっているそうです。また、将来的に都会に進学や就職をしていく場合、薬物の恐ろしさについて学習し、しっかりと認識を深め、対処するための知恵を身につけておくことが、重要であると思います。



4年生の公開授業は、例年取り組んでいるサケについての学習を見ていただきました。今年で14回目となる3月14日(土)14時からのサケの放流会に向けて、体験的な学習を重ねていきます。島根県内でもこの体験ができる小学生は少ないと思います。1年間を通して、緑の少年団の活動など、環境学習に取り組んできた4年生です。サケを育て、放流する体験を通し、地域の川や環境、自然の素晴らしさを学び、環境に対する意識を深めていってほしいと思います。

租税教室(6年生)

2月3日(月)に6年生が租税教室の授業を受けました。毎年、卒業前のこの時

期、社会の仕組みの柱である税金について理解を深めることをねらいに実施しています。『公』への意識も強くなり、来年度からは中学生になるこのタイミングは意義あるものだと思います。今年度は読み聞かせボランティアで来ていただいている吉川さんが講師でした。6年生は大変熱心に税についての学習に取り組んでいました。

1日入学

2月4日（火）に来年度の新生と保護者を迎えて、一日入学を行いました。新生は1年生との交流活動を楽しんでいました。1年生も張り切って発表などをしていました。来年度、新生が元気に入学してくれることを、全校のみんなで見守りにしています。



1日入学で新生保護者に話した内容

本校では、『感謝・尊敬・寛容』ということ大切に教育活動を行っています。感謝は「ありがとう」、尊敬は「すごいなあ」、寛容は「いいよ」という気持ちです。これまで、この3つの心を大切にしようと言ってきました。

入学までに、「ありがとう」とお礼が言えること、人の良さを見つけ、素直に「すごいなあ」と思えること、嫌なことがあっても、相手が謝ったら「いいよ」と許してあげること、この3つの気持ちや態度を育てていってほしいと思います。

そして集団生活に入るので、挨拶、返事、履物揃えの3つを普段の生活でできるようにしておくことが、スムーズなスタートにつながります。できれば、素直に「ごめんなさい」を言えるようになっておくと、人間関係がよくなり、楽しい学校生活を送ることができると思います。これは学力、社会適応力等を育てていくための重要な基盤になります。家庭でもお手本を見せてもらい、「ありがとう」「ごめんなさい」を抵抗なく言える子どもに育てておくと集団生活においてプラスが多くなります。また、「我が子が一番」は親として当然ですが、自分の子だけをよい子にすることはできません。みんなでよい子になっていくことしかできません。そのためにPTAがあります。どうかPTA活動への積極的な参加、協力をよろしく願いいたします。

研究授業（3年生）

2月5日（水）に3年生が国語の研究授業を行いました。初任者として1年間研修を続けてきた加藤有希教諭の最後の研究授業でした。3年生は落ち着いた態度で学習に取り組み、発言も積極的に行っていました。来年度は4年生になり、学習内容も難しくなってきますが、この調子で頑張ってもらいたいと思います。



全校朝礼

2月12日（水）の全校朝礼では書き初めや読書ノートなどの表彰をしました。冬休みの感謝日記の表彰もしました。後で次のような内容を話しました。

さっき表彰しましたが、表彰の意味は結果だけを誉めているわけではありません。「あなたの中に優れた力があります。それをしっかり伸ばしてください」という応援の気持ちが込められています。皆さんはそれぞれに、自分の人生を切り拓いてゆく素晴らしい力を持っているのです。冬休みの感謝日記も、今までで最多の人達が取り組んでくれました。とても嬉しく思います。

前から言っていますが、自分の力を伸ばし、発揮していくための大切なのは「主人公の道を歩くぞ!」という心構えです。皆さんは人生の『被害者』ではないのです。『主人公』なのです。自分を被害者と考えると少し楽にはなります。人のせいや社会のせいにするのは、とても簡単にできるストレス解消法でもあります。しかし、度を超えると、何でもかんでも自分以外のもののせいにし、自分を振り返ることができない人、成長できない人になってしまいます。

被害者の道を歩く人は、すぐに他者に責任転嫁をしたり、不平不満を漏らしたり、不幸自慢をしたりすることが当たり前になってしまいます。習慣になってしまうのです。「私ってかわいそうでしょう…」と被害者であることをアピールして、他人から同情や優しさを得ようとする方法、他人の善意や助けを利用して、自分を元気づけようとするやり方がその人の生き方になってしまいます。この生き方は『依存』の一種です。子どもの頃はこの方法をよくやるし、依存して当たり前ですが、成長するにつれて自立していかなければなりません。大人になっても直らず、この方法をやりすぎてしまうと、沢山人に迷惑をかけてしまいます。ひどくなると被害者であることを特権にして自分を正当化し、人をいじめたり、差別したりする行動まで引き起こし、終いには『加害者』になってしまいます。

どうか皆さん、『人生の主人公』としての自覚を持って、人に優しくし、頑張っ
て学び、芯の強いたくましい心を持って支え合っていきましょう。『感謝・尊敬
・寛容』の心を育て、これからも感謝の種探しをしていってほしいと思います。
人生を自分で切り拓いていく力を持っていない人は、この世に生まれてはこれら
れないと思います。そのことに気づき、自信を持って、力強く、前向きに頑張っ
ていきましょう。皆さんは人生の被害者ではなく、人生の主人公なのですから。

むかし遊びの会（1・2年生）

2月13日（木）に地域の方々に来ていただき、昔の遊びを教えてくださいました。低学年は、とても楽しみながら活動していました。いい思い出になったことだろうと思います。



うそつくな・親切に…幼少期にしつけ、年収高め

6年前の記事ですが毎年紹介してきました。しつけの影響力、大切さについて考えさせられる興味深い内容ですので再度紹介します。

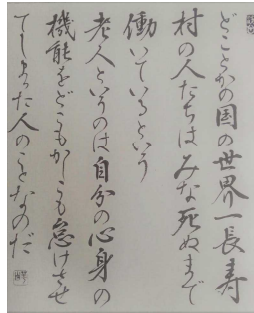
「うそをつかない」「他人に親切にする」「ルールを守る」「勉強をする」という4種類のしつけを子どもの頃に受けた人は、どれも受けていない人より、平均年収が約86万円も高い。こんな調査結果を神戸大経済経営研究所の西村和雄特命教授らの研究グループが発表した。グループはインターネット調査会社に登録した人から無作為に選んだ9万人に調査票を送り、仕事を持つ1万3164人から回答を得た。幼少期に周りの大人からよく言われたことを8つの選択肢から選んでもらい、年収を比較した。その結果、「うそをついてはいけない」としつけられた人の年収は、平均約448万円でも高く、しつけられた覚えがない人（同約398万円）を50万円上回った。「他人に親切にする」「ルールを守る」「勉強をする」も、しつけを受けた場合の方が、年収が約29万～15万円高かった。さらに、これら4つのしつけを全て受けた人の平均年収は約479万円で、ひとつも受けていない人（約393万円）と比べ、約86万円高かった。一方、「あいさつをする」や、「ありがとうと言う」といったしつけは、年収の高さとはほとんど関係なかった。【平成25年9月20日(金)14時33分配信 読売新聞】

これらの調査結果は、社会に出てから、身につけた知識・技能を上手に発揮していく上で、「うそをつかない」「他人に親切にする」「ルールを守る」という生き方が重要であることを示しているのだと思います。

知識・技能は確かに大事です。しかし、正直さ、誠実さ、親切心、思いやり、公德心などのベースをしっかりと育んでこそ、それらのものが生きるものであり、そうやって初めて、確かな学力、生きる力などと呼ぶことができるのではないのでしょうか。そのような力を育む教育を目指し、職員一同、力を合わせて頑張っていきたいと思えます。また、「あいさつをする」や「ありがとうと言う」といったしつけは、年収の高さとはほとんど関係なかったとありますが、幸福度や人間関係の充実度とは、相関関係が高いはずだと想像できます。どれも大切なしつけであることは間違いのないと思います。

餞の言葉

一昨年、平成29年10月10日（日）に行われた黒松地区の敬老会の最後、藤田豊黒松地区連合自治会長が、敬老会新入会員の代表挨拶をされました。その中で、藤田会長が退職時に上司からもらった色紙の内容、『どこらかの国の世界一長寿村の人たちはみな死ぬまで働いているという 老人というのは自分の心身の機能をどこもかしこも怠けさせてしまった人のことなのだ』という言葉を紹介されました。私にとって衝撃的で、ずっと心に残っていました。そして、時間と共に曖昧になっ



ていく自分の記憶を、少し残念にも感じていました。私自身が退職を迎える今年度、思い切って藤田氏にお願いし、コピーをいただけることになりました。

働くとは『はた（傍）を楽にすること』と聞いたことがあります。傍を楽にして、それを「良かったなあ」と自分の喜びとして感じられる人にとっては、働くことが苦ではなく、喜びとなり、長寿にも繋がっていくのでしょうか。自分が早く楽になりたいと願う、すぐに易きに流れ、怠けがちな私にとっては、活が入るちょうど良い言葉です。

3月の詩 雨にも負けず

3月の詩は全校で『雨にも負けず』の暗唱を予定しています。この詩は6年前、校長2年目から毎年3月に暗唱してもらっています。江津東小学校でももちろん毎年、子どもたちに暗唱をしてもらっています。4年目になるので、もう完全に覚えている子どももいると思います。長い詩で内容も難しいと思いますが、毎年、低学年でもスラスラと暗唱できる子がいて、子どもの力はすごいなあと感じさせられます。

なぜ、この詩にこだわっているかという、私自身が救われたからです。最後の『みんなにでくのぼ一と呼ばれ

褒められもせず 苦にもされず

そういうものに わたしはなりたい』

という部分が苦しいときにふっと脳裏に浮かんでくるのが何回もありました。しかし、『そういうものに わたしはなりたい』の部分はなかなか受け入れられませんでした。例えば『それでも私は自分の道を行く』などの自分を鼓舞する内容であったなら受け入れられそうな気もするのですが、いかんせん『そういうものに わたしはなりたい』とくるもので、「とても、とても、無理、無理！」みたいな感じがしてしまいます。やはり人から認められたい、評価されたいという気持ちが強いのだろうと自覚します。ただ、本気で『そういうものに わたしはなりたい』と思えたら、怖いものはなくなっていくのであろうとも思えます。私はこの詩を思い出したとき、なぜか不思議に元気づけられてきました。若いときは全然好きな詩ではなかったのですが、50代前半頃からなぜか頻りに思い出すようになりました。今ではとても好きな詩です。子どもたちは、これからの人生の中で様々な学びを積み重ねていくわけですが、この詩の暗唱が、何かプラスの効果をもたらしてくれたらと、願うところです。

雨にも負けず 宮沢 賢治

雨にも負けず
 風にも負けず
 雪にも夏の暑さにも負けぬ
 丈夫なからだをもち
 慾はなく
 決していからず
 いつも静かに笑っている
 一日に玄米四合と
 味噌と少しの野菜を食べ
 あらゆることを
 自分を勘定に入れずに
 よく見聞きし分かり
 そして忘れず
 野原の松の林の陰の
 小さな萱ぶきの小屋にいて
 東に病気の子供あれば
 行って看病してやり
 西に疲れた母あれば
 行ってその稲の束を負い
 南に死にそうな人あれば
 行ってこわがらなくてもいいといい
 北に喧嘩や訴訟があれば
 つまらないからやめろといい
 日照りの時は涙を流し
 寒さの夏はおろおろ歩き
 みんなにでくのぼ一と呼ばれ
 褒められもせず 苦にもされず
 そういうものに わたしはなりたい